

日本語学習者の辞書使用に関する Can-do 記述の試み -アンケート調査自由記述欄の質的分析をもとに-

鈴木智美

東京外国語大学留学生日本語教育センター

tmsuzuki@tufs.ac.jp

1. 研究の目的

本研究では、日本語学習者の「辞書」¹⁾の使用に焦点を当て、特にその文章表現を効果的に支援する方策を検討することを目的としている。研究にあたっては、まず日本の大学で日本語を学ぶ留学生を対象に辞書使用についてのアンケート調査およびインタビュー調査を行っている。鈴木(2013)では、このアンケート調査の自由記述欄の回答を質的に分析する²⁾ことを通じて、学習者の辞書使用のスキル養成のポイントを提示した。本稿では、さらに学習者が日本語を使って何ができるのかを示す「Can-do」の記述において、学習者の主として「書く」活動に関わる方略として、辞書使用に関する記述を加えることを考えたい。

2. 研究の背景

2.1 日本語学習者の辞書使用

日本語教育では、これまでも辞書の充実の必要性が指摘されてきた。近年は辞書の開発を支援するための大規模なデータベース構築や、学習者の文章表現を支援するシステムの研究開発なども進められている。

一方、より具体的に日本語学習者が辞書を「使う」ことに着目した考察として、例えば鈴木(2010)では、作文コーパス³⁾の中から辞書の使用が一因となり引き起こされていると思われる初中級レベルの学習者の不自然な表現に着目している。そこでは、学習者とその使用する辞書の目的・レベルの不整合や、学習者が辞書に記載されている表現を選択する際に、的確な判断ができていないと思われることがその原因ではないかと指摘している。

また、鈴木(2012a, 2012b, 2012c)では、留学生の辞書使用についてのアンケート・インタビュー調査についての報告・考察があり、辞書には良質な例文を学習者がアクセス可能な形で豊富に提示することがさらに求められるという点のほか、教育現場において文章表現カリキュラム等に辞書使用のスキル養成を取り入れていくことや、学習者が日本語を使って何ができるのかを示す「Can-do」記述に、学習者の「書く」活動に関わる方略として、特に中級レベル以上を目安に「辞書を使用し、的確な表現を探し出すことができる」等を加え、学習者の辞書使用を積極的・肯定的に位置付けていくことが提案されている。

2.2. 日本語の熟達度を示す「Can-do」記述

国際交流基金が、ヨーロッパにおける言語教育・学習の基盤として位置付けられる枠組み「CEFR」(Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment. 外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠)の考え方を基礎として開発した「JF 日本語教育スタンダード」では、日本語の熟達度を示す「Can-do」記述文を、種々の日本語教育実践に利用可能なように「みんなの『Can-do』サイト」(<http://jfstandard.jp/cando/top/ja/render.do>)でデータベースとして公開している。

上記サイトから試みに「辞書」をキーワードとして該当する Can-do 記述を検索してみると、「読む」という活動の中で「辞書を使用すれば」という条件として設定されていることは確認できるが、文章を産出する場合の辞書の使用についての記述は見られない⁴⁾。

3. 学習者の辞書使用のスキル養成のポイント：日本語レベル別に

以下、表1では、鈴木(2013)で抽出した日本語学習者の辞書使用のスキル養成のポイントについてまとめた。本研究で辞書使用について提案したいと考えている「Can-do」の記述とは、日本語の「熟達度」を示すものであり、また多くの日本語教育プログラムが実際に日本語のレベル別にクラス設定を行っており、現実的な教育への応用という観点から、ここでは日本語のレベル別⁵⁾に学習者の辞書使用のスキル養成のポイントを抽出した。

表1 日本語のレベル別に抽出した学習者の辞書使用についてのスキル養成のポイント

レベル	辞書使用のスキル養成のポイント
初級～ 初中級	<ul style="list-style-type: none"> 辞書の基本的な構成などについてのオリエンテーションを行う。 多様な辞書ツールの種類や特徴について情報をシェアし、どのような時にどんな辞書が使えるかについて話し合う。
中級前期	<ul style="list-style-type: none"> 電子辞書の操作方法やオンライン辞書の検索方法について、疑問点を出し合い、確認する。 未知の漢字の意味・読み方を辞書から探し出す方法について話し合い、確認する。 辞書を工夫して使用する学習者とはどのような学習者か、学習者像について考え、話し合う。
中級中盤	<ul style="list-style-type: none"> 使用している辞書ツールをリストアップし、それぞれの特徴や使い方について情報をシェアする。 「未知の漢字を調べる」「ある言葉の使い方が知りたい」などテーマを決め、具体的な例に沿って、どのような辞書ツールをどのように使うことができるか、またその際の問題点やその解決策について話し合う。 上級レベルの学習者はどのような辞書をどのように活用しているか、情報を収集し、自分の辞書の使い方との共通点・相違点について考える。 電子辞書などを新しく購入する際のチェックポイントをリストアップしてみる。
中上級	<ul style="list-style-type: none"> 使用している辞書ツールの利点および弱点について、具体的な例を挙げて話し合う。 漢字力、語彙力、文章作成力等を向上させるために、辞書がどのように活用できるかについ

	て考え、話し合う。
上級	<ul style="list-style-type: none"> ・ 普段どのような場合にどんな辞書をどのように利用しているか、情報をシェアし、また問題があった時にそれをどのように解決しているか、あるいは解決できるかについて、話し合う。 ・ 辞書を活用してできることとできないことについて考え、話し合う。
超級	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日本語学習者にとって、どのような辞書ツールがあればより役に立つだろうか、それはなぜかについて話し合う。 ・ 初級や中級レベルの学習者、あるいは自分と同じ母語の日本語学習者に対して、辞書の使い方についてアドバイスをするとしたら、どのようなことが考えられるか、話し合う。

4. 辞書使用に関する Can-do 記述

学習者の辞書使用に関する Can-do 記述を抽出するためには、上記に示したようなスキル養成のポイントに沿って、それぞれが十分に達成できたという場合を想定することが1つの方法として考えられる。以下は、この観点から、学習者の辞書使用についての Can-do 記述を日本語のレベル別に抽出した試案である。

表 2 日本語学習者の辞書使用についての Can-do 記述（試案）

レベル	辞書使用についての Can-do 記述
初級～ 初中級	<ul style="list-style-type: none"> ・ 辞書の基本的な構成がわかる。 ・ 辞書ツールには多様な種類があることについて理解している。
中級前期	<ul style="list-style-type: none"> ・ 電子辞書の基本的な操作方法や、オンライン辞書の基本的な検索方法がわかる。 ・ 未知の漢字の意味・読み方について、辞書を使って探し出す方法を知っている。
中級中盤	<ul style="list-style-type: none"> ・ 複数の辞書ツールの特徴について理解し、目的に応じて使い分けができる。 ・ 複数の辞書や複数の検索方法を組み合わせ、目指す情報にたどり着く工夫ができる。
中上級	<ul style="list-style-type: none"> ・ 使用している辞書ツールの利点および弱点について把握している。 ・ 漢字力、語彙力、文章作成力等を向上させることを念頭におきながら、辞書が使用できる。
上級	<ul style="list-style-type: none"> ・ 母語を同じくする学習者などに、辞書を選ぶ際のポイントや、辞書を使用する際の注意点などがアドバイスできる。
超級	<ul style="list-style-type: none"> ・ 総合的に日本語力を向上させるために、自覚的に辞書を活用する姿勢を身につけている。 ・ 初級や中級レベルの学習者、あるいは母語を同じくする学習者に対して、辞書の効果的な活用法についてアドバイスできる。

5. 今後の課題

今後、本研究において導き出した辞書使用のスキル養成のポイント、および辞書使用についての Can-do 記述を、実際に日本語教育の現場で検証し、改善していきたいと考えている。

注

- 1) 「辞書」とは、書籍タイプのものだけでなく、電子辞書、携帯電話のアプリケーション、PC のアプリケ

ーション、オンライン辞書などを広く含めたものとする。

- 2) 「辞書の使用をめぐって不便だと感じること」および「辞書の使い方の工夫」に関する自由記述回答（延べ 56 名分）の内容を、質的研究のためのデータ分析手法である「SCAT」（Steps for Coding and Theorization）（大谷 2008a, 2008b）の分析手法を応用し、言語データとして質的に分析している。
- 3) 使用コーパスは、「JLPTUS 作文コーパス」（東京外国語大学留学生日本語教育センター）である。
- 4) ただし、このサイトは、それぞれの教育現場における教育目標や対象に応じ「Can-do」を書き換えたり、また新しく作成したりすることを視野に入れて公開されているものである。
- 5) ここで「初級」とするのは日本語学習時間約 300 時間内のレベル、「初中級」は初級の学習を終えた後、日本語能力試験「N4」合格を経て中級へと向かういわば「橋渡し」のレベル、その後「中級前期」を経て、「中級中盤」は終了時におよそ日本語能力試験「N3」合格が目安となるレベル、「中上級」は終了時に「N2」合格、「上級」は学習中から終了時にかけて「N1」合格が目安となるレベル、「超級」は既に日本語能力試験「N1」に合格しているレベルを想定している。

参考文献

- 大谷尚（2008a）「4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案—着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き—」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』54(2) pp. 27-44
- 大谷尚（2008b）「質的研究とは何か—教育テクノロジー研究のいっそうの拡張をめざして」『教育システム情報学会誌』25(3) pp. 340-354
- 国際交流基金（2012）「JF 日本語教育スタンダード 2010 [第二版]」独立行政法人国際交流基金
- 鈴木智美（2010）「辞書の使用が引き起こす学習者の不自然な表現—『JLPTUS 作文コーパス』の作文から見えてくること—」『2010 世界日本語教育大会（ICJLE）予稿集』（DVD 版） 1436-0-1436-9
- 鈴木智美（2012a）『留学生の文章産出時における辞書使用の実態調査—言いたい日本語はどう見つけるか—』平成 22 年度（2010 年度）～平成 23 年度（2011 年度）科学研究費補助金挑戦的萌芽研究 研究成果報告書（課題番号：22652047、研究代表者：鈴木智美）東京外国語大学留学生日本語教育センター 鈴木智美（編著）
- 鈴木智美（2012b）「留学生の辞書使用についての実態調査—東京外国語大学で学ぶ留学生へのアンケート調査の結果と分析—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第 38 号 pp. 1-16
- 鈴木智美（2012c）「留学生は言いたい日本語をどう見つけるのか—留学生の文章産出時における辞書使用の実態調査—」『2012 年日本語教育国際研究大会予稿集』第 2 分冊 p. 164
- 鈴木智美（2013）「日本語学習者のための辞書使用のスキル養成のポイント—留学生の辞書使用に関するアンケート調査自由記述欄の SCAT による質的分析を通して—」『東京外国語大学論集』第 86 号